

# 大英図書館の書物修復事情と 書物修復の今後の展望

西洋古版本修復家 板倉正子

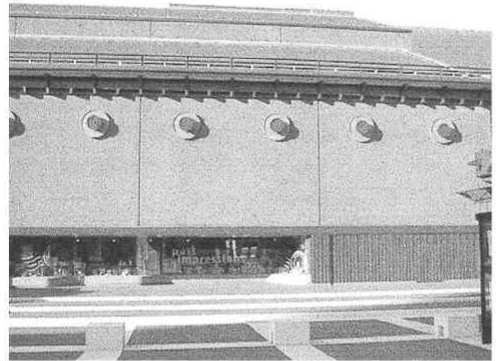


大英図書館1

## 1. 新館の大英図書館を探訪

昨年、大英図書館（British Library）の格別のお計らいにより、当館の主に書物修復の現状について修復部門の見学をさせていただく機会を得ました。その見学概要を報告し、所感などを少し述べさせていただきます。

大英図書館訪問の予定（1999年10月19日）に合わせ、前日の夕方ロンドン・ヒースロウ空港に到着した私は、取り敢えず空港近くにホテルを取り翌日に備えた。10年ぶりのロンドンで、しかも前は2、3日滞在しただけの経験しかなかったのでかなり緊張気味だったが、ホテルでの礼儀正しくかつ親切な応対にリラックスした。出発前の忙しさから交通機関の確認など何一つ準備はできていなかったが、



大英図書館2

大英図書館の場所やそこへの行き方など私の質問に、ホテルのコンシェルジュは地図を見せながら丁寧に効率よく説明してくれた。訓練の行き届いた洗練された職業的親切さは、それが仕事上のものでわかっていても、旅の疲れや不安を和らげるよい薬である。一応の情報を得られたので翌日の出発時間を逆算し、取り敢えず早々と床に就いた。

翌日、約束の10時に遅れないよう8時前にホテルを出発したが、図書館のメインホールの受付に到着した時は10時を少し過ぎていた。1997年に完成した大英図書館の新しい建物は、広い前庭の向こうに、黒い屋根とレンガ色の壁に赤い縁取りで、モダン建築の神社を思わせる静かなたたずまいである。

東洋部門のコレクション部長であるユーイン・ブラウン氏がすべての手はずをととのえてくださり、当日は修復室を見学できることになっていた。受付で来意を告げると、しばらくして、修復部門のジョン・マンフレッド氏が出迎えてくれた。短い挨拶を済ませると彼はすぐに、修復室に案内してくれた。

## 2. 二つの修復室と修復のコンセプト

大英図書館の中には、東洋と西洋、二つの修復部門がある。西洋部門では洋書類、ヨーロッパ関係の地図、文書類など、書物形態のものから一枚もの資料を主に修復し、東洋部門では、日本、中国などの刊本、軸類に加え、敦煌から発掘された木簡に類するものなど様々な所蔵資料の修復を行っている。両修復室とも5、6人のスタッフが働いており、その中には研修生もいる。

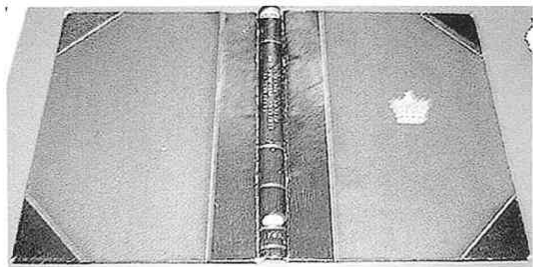
ジョン・マンフレッド氏は、西洋部門の責任者で、東西両方の修復部門に関わる興味深い資料を見せてくれた。それは和本を修理<sup>1)</sup>したもので、すべてが立派な革装の洋書スタイルに再製本されている。こうした改装は、1900年代初頭からつい20年ぐらい前まで普通に行われていたそうである。「オリジナルを最大限に残す<sup>2)</sup>」という書物修復のコンセプトは今ではもう世界の常識になっている。しかし、この合意が1966年、フィレンツェ大洪水<sup>3)</sup>後、文化財保存意識の高まりの結果であることを考えると、大英図書館でさえつい最近まで歴史的過ちを犯していた、という事実も理解できる。現在は、それらの和書類を西洋部門でせっせと解体し、東洋部門で元の和本スタイルに製本し直しているという。

東洋部門では、中国のいくつかの場所で発掘された珍しい文物を見ることができた。木製の箱様のものにスライド式ふたのついたもので、係の人の説明によると公式文書の手紙であるという。ふたの部分には穴があり、その穴は泥土で封印が施されるようになっている。ヨーロッパにおける密書の封蝋の役割をはたしているらしい。

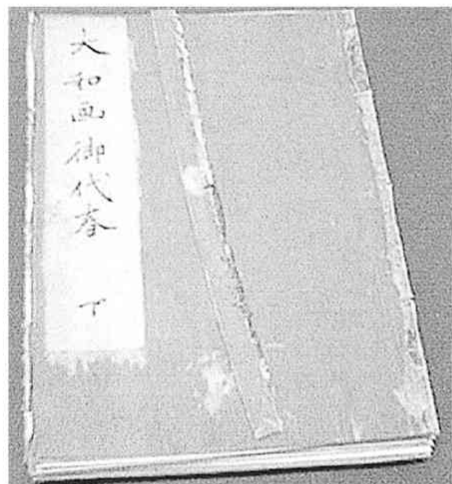
東洋部門における修復は、紙資料だけでなく、木や竹に書かれたものもあり、それらの多くは、破片を寄せ集め、欠けをついでアクリルのケースに収めるといふ。修復と言うよりは、復元という言葉のほうがピッタリする仕事である。

## 3. 修復の実際

今回の見学では「外れた表紙をどのように



和本を改装してつけられた表紙



改装から元へもどされた和本



箱型の密書・中国で発掘されたもの

継ぐか」とか、「革の継ぎ目をどのように処理するか」というような技術的な問題ではなく、それぞれの資料をどんな基準で修復処理をするのか、という点を重視した。たとえば1500年代の書物でも、過去に、多いものになれば2回、3回と修復の手が入っている。どの時点をオリジナルとするのか。また、明らかに出版年代に製本様式が一致しないものなどの場合、どのように処理するか。実際の場面では、その決定を一修復家の判断とするにはあまりに大きな問題である。

大英図書館では、「コンサベーションバイインディング<sup>4)</sup>」という概念を多く取り入れ、資料として利用できることに重点を置いた修復が行われている。つまり、古い書物をあたかも骨董品のように、できるだけ元の状態に戻すというよりは、新しく綴じ直し、新しい表紙をつけて書物として利用しやすいように、書物として長持ちするように、修復手当が行われている。その場合、もちろん、元の状態に関する克明な記録と、オリジナルの表紙などは徹底的に残し、別に保管されている。また接着剤の使用を最小限に抑え、接着剤による資料へのダメージを極力排除し、将来の再修復を可能にしている。このあたりの方針には、世界一流図書館の見識とバランス感覚が伺える。

一般に書物修復においては、大きなふたつの流れがある。ひとつは、博物館方式と言われているもので、書物をオブジェとして捉え、できるだけオリジナルに忠実に修復し、どちらかと言うと書物としての機能性より、外見を重視した修復手当である。修復後は所蔵品として、ガラスケースの中に入れておけば事足りる博物館ならではの方法である。

一方図書館や文書館では、書物のコンテンツが問題であり、その為、修復後は書物として利用されるということを前提に、耐久性と機能性を重視した修復手当が行われなければならない。その場合時として、外見の良さを犠牲にせざるをえないケースが多い。

この問題は、右か左かと言うような単純な問題ではなく、書物修復に携わるすべての人

間を常に悩ませる厄介事である。

#### 4. 各図書館の方針

世界のそれぞれ図書館では、各々自館の性質を考慮し、独自の判断で基準を決めている。たとえばベルリンの州立図書館では、元の製本スタイルをそのまま踏襲するのではなく、開きやすく改良した製本にすることが多い。それは所蔵品が1600年以前のタイトバック<sup>5)</sup>という製本様式によるものが多く、もとのスタイルのままではその書物は90度程度しか開くことができず、結果的に本文をもっと傷めてしまう危険が大きいからである。

また他方、ドイツのウォルヘンビュッテルにあるアウグスト図書館修復室では、パーチメント表紙の場合、表紙を完全に新しい素材に取り替えてしまう。担当者の意見によると、パーチメント表紙のものはほとんどの場合表紙の装飾がなく、製本スタイルにそれほど特徴が無いので、多くの労力と時間をかけてオリジナルの表紙を救う必要がないと言う明快なものである。

一方、アメリカのハンチントン図書館では、加える手を最小限にし、たとえばはなぎれ<sup>6)</sup>などかなり傷んでいる場合でも編みなおすことはしないと言う。

代替物は有るのか、貴重度はどの程度なのか、利用度はどのくらいか、など判断の基準とする要素は多く、これを決めるのは難しい問題である。また、各図書館の所蔵物がどの年代に属する書物かということも大きな判断材料である。一般的に貴重書 (Rare Book) とは、ヨーロッパでは1600年以前、イギリスでは1640年以前、アメリカでは1800年以前の書物と定義<sup>7)</sup>されている。わが国においての貴重書概念はもっと多様で、それぞれの図書館の独自性によっていると考えられる。洋書に関して、修理と修復の基本概念すら確立していない我が国の現状では、修復のコンセプトを確立し、各々図書館の修復基準のスタンダードを決めることは、中々難しいことである。しかし、貴重な文化遺産である多くの書物が、

修復という名のもとに記録なしに改装再製本される危険性を考えると、一日も早く、何らかの基準を作ることが必要である。

## 5. 大英図書館の独自性

大英図書館では基本的に、所定の手続きを経た研究者には制限なくそのすべての所蔵資料を研究材料として公開し、閲覧させるという建前を取っている。その資料は、膨大かつ多岐にわたるものであるが、たとえそれがいかに貴重な資料、たとえば紀元前のメソポタミアのタブレットであろうが、初世紀のパピルスの巻物であろうが、すべて公開することにより、世界最大のリサーチ図書館としての多大な役割を果たしている。

そのような自館の独自性に基づき修復の基本姿勢を貫いている。特に方針において他の図書館との相違点は、10世紀以前の書物などのようにオリジナルを最大限に尊重して復元すると、研究資料としての利用がむずかしくなるものについては、現存する表紙は個別に保存し、本文のテキストは書物として利用しやすい一般的で、堅牢な製本スタイルが採用されている点である。

また 背バンド形成の新しい方法、より開き易い製本方法など、日々研鑽を行いよりよい方法を常に模索している点に大きな感銘を受けた。大英図書館方式をそのまま日本に適用することは出来ないにしても、日本の図書館、各関係機関が保存と修復のコンセプトを確立し、一定のガイドラインを設ける日が、一日も早く来ることを、一修復家として願ってやまない。

## 注

- 1) 書物修復と修理の概念は日本では明確に定義されていない。オリジナルをできるだけ残した手当を修復とし、その他の方法を一般的に修理とする。
- 2) 書物修復に関して、例えば古い表紙を取り去って新しい表紙を付けたりする、などの手法はできるだけ避け、どんなに傷んでいる素材でもできるかぎり残すこと

が標準的な考えになっている。

- 3) 1966年11月4日、フィレンツェ、アルノ川の氾濫で、協会、美術館、図書館などが甚大な被害を受けた。この時世界中から、製本家や修復家がボランテアでフィレンツェに駆けつけた。水害を受けた沢山の書物はそれぞれの国に持ち帰られその後10年以上をかけて修復された。

この事態が契機となり、修復家や製本家の交流が始まり、書物修復に関する概念が確立し、研究機関が発足した。

- 4) 修復というよりは保存という大きな概念で、それぞれの機関により細かい規程は異なる。

- 1 オリジナルを傷めない。
- 2 健全な素材を使用する。
- 3 再修復が可能な状態にする。

と言う3本柱を中心にしつつ、書物として最大限利用できるよう、思い切った改良を加えた製本スタイルを採用する機関もある。

- 5) 表紙の革をじかに本体にかぶせる製本方法である。そのため本は開きにくく、むりやり開こうとする事により背の革が割れてしまう。
- 6) 書物の本体背の天と地の部分を糸でかがった部分をいう。現代の機械製本された書物では、リボン様の布が貼りつけてある。
- 7) 『Bookbinding & Conservation by Hand A Working Guide』 LAURA S.YOUNG published by Oak Knoll press より